

科学大と藝大 共同シンポジウム

学長ら「科学と芸術 人類の未来」テーマに議論

東京科学大学と東京藝術大学の共同シンポジウムが5月26日、科学大大岡山キャンパスの学生交流施設「タキプラザ」で行われた。複雑化した現代社会では、科学と芸術の双方の視点を生かした新たな表現と技術革新が求められている。シンポジウムでは「科学と芸術 人類の未来」をテーマに、科学大の大竹尚登理事長と田中雄二郎学長、藝大の日比野克彦学長らが、次世代の創造的な人材育成について話し合った。



意見交換する(左から)科学大の田中学長、大竹理事長、藝大の日比野学長。田中学長は「科学と芸術は表裏の関係」、日比野学長も「科学とアートは似ている」とそれぞれ発言した。

ゴットフリート・ワゲネル(1831-1892)という、日本の近代窯業の基礎を築いたドイツ人がいる。亡くなる1892年までの8年間、東京職工学校(東工大の前身)で教鞭をとっており、科学大によると、同氏は「美術と工業の融合」を唱えていたという。その思いは脈々と引き継がれ、多くの人材が輩出されていった。また、東京職工学校の2代目校長である手島精一は「工業製品は性能はもとより、使いやすく美しくなければならぬ」との考えに基づいて「工業図案科」を設置した。同科は1914年、東京美術学校(藝大の前身)に移されている。

シンポジウムは、こうした「科学と芸術が交差する歴史」を踏まえて行われた。科学大の大竹理事長は「東工大の美術を取り入れた工業教育はものすごく先駆的だった。日本において、技術と芸術の融合はさらに進んでいる」と指摘。「芸術と先端科学は密接に関連していて、新しい機能が生まれる可能性もある」などと話した。



タキプラザ入口に設置されているパブリックアート